



# ミドリさんと怒りん坊

---

mary-melly

---

「で？なんでお前がここにいるんだ？」

素朴でもなんでもない質問。  
普通に考えて自宅に招いたこともない奴がいたら誰でも驚く。  
それに荷物の量が半端ない。  
まるで追い出されたようだ。

「うう、追い出され...違う、ミドリさん家出してきたんだよ！！」  
「このアホ！！また煩くして姉貴に追い出されたんだろ！！前は駿河の家だったな」

怯えた声が小さく聞こえたが、頷いたのを見て千葉はまたイラっとした。

「てめえは大人しくできねえのか！！それに俺はてめえを泊める気なんてねえんだよ！！」  
「.....ふっ、ふえ.....うわああああああああん！」

大声で泣き始めた。  
その声は薄く開いたドアから外へ漏れていった。  
これはヤバいと思った千葉は慌ててドアを閉め、ミドリを見下ろした。  
決して慰めることはない。  
ただ見つめている。

「びゃ〜ん！！」  
「.....」

だんだん疲れてきたのか声が小さくなっていく。  
それでも慰めてはくれない。  
ただただ見下ろしてるだけ。

「ひっく...ひっく...」  
「そろそろ終わりか？嘘泣きしても無駄だ。俺には効かねえよ」

このごろ覚えたミドリの悪知恵、嘘泣きだった  
駿河も泣かれてしょうがなく泊めたそうだ

「なんで？」  
「あ？」  
「なんでわかったの？」  
「同じ社内のやつに同じ手口を使った時点でバレバレなんだよ」  
「...そっか」

何かに納得したようでスッキリした顔をした。  
その行動も見てるだけ...。  
のつもりだったがいきなり荷物を解き始めたのに千葉は怒った。

「てめえ、何してやがんだ！！何荷物解いてんだよ！！誰も許してねえだろ！！」  
「だって理由も知ってるんだったら」  
「ダメだ！じゅ...お前の大好きな社長のとこにでも行けよ！」

純也は社長になってから一人暮らししていた。  
姉貴とも別々に暮らしていた。

「う～じゃあ、純也を食べに行く～」  
「それはダメだ」

即答した。  
提案したのは自分だが社長に手を出されることは拒んだ。

「なんで？いいじゃんか、純也は千葉のものじゃないよ？」  
「それでもダメだ」  
「純也はあいつのだよ？守る意味なんてあるの？」

言われたとおり、社長には他の奴がいる。  
秘書とは言われても満足できない。  
それでも…。

「やっぱりダメだ」  
「じゃあ、ここに居させてよ。他に行くところないから」  
「ダメだ」  
「矛盾してるよ。居ちゃダメなのに行っちゃダメって」  
「後者は言ってない」  
「言ってるじゃん。純也のところに居ちゃダメなんでしょ？」  
「他に行くところはねえのかよ」

少し下を向いて頷いた

「マジかよ…」  
「だってみんなのそこ行っただけ先客が居たり、ダメって」

溜め息を吐くことしか出来なかった  
頭を抱えて千葉は仕事に取り掛かった

それから俺たちの同居生活が始まった

「てめえはいつまでこの部屋にいるつもりなんだ!？」

堪忍袋の緒が切れた千葉がミドリを怒鳴りつけた。  
ミドリが押しかけてきてからすでに2週間近くたっていた。  
出張だったミドリの父親もそろそろ自宅へ帰ってるだろう。

「てめえの父親はまだ帰ってこねえのかよ」  
「まさか、そんな長期出張ではないよ。もう家に帰ってきてる」

千葉の言葉にミドリはきょとんとしながら答えた。  
その答え方にまたカチンときた千葉がふつつつと沸く怒りをはじけさせる。

「なんで帰らねえんだよ!？てめえはファザコンだろが!!家に帰れ!!」

千葉の話を手元でカチカチ操作されてるゲームに夢中なようだ。

「んーとね。千葉には言ってなかったけどパパから了承もらったから大丈夫だよ」  
「何が大丈夫なんだ!!」

目はゲームから放さずにへらへらと言った。  
千葉が怒鳴ったのにも驚きもしなかった。

「だからパパにここにいていいよって言われてるから大丈夫ってことだよ」  
「わけわかんねえよ」  
「わかんないならわかんなくていいんじゃないかな」

人をからかうようにクスクス笑う。

「了承を取ったからってここにいていい理由にはならんだろが!!」  
「なるよ。だって反対するのはパパくらいしかないもん」

人の考えなど耳にしない顔をしてるので言うてやる。

「俺が断固反対だ!!」  
「千葉の意見は聞かないよ。絶対に反対するってわかってるから」

はなから反対されるのがわかってるなら居座らなければいいのだ。  
しかし、そんなことを聞くはずもない。

「邪魔だ。帰れ」

強く言葉を放って千葉は仕事に取り掛かる。  
千葉が仕事をしてる間、ミドリはゲームに夢中になるか返事が返ってくるはずもない千葉に話しかけたりする。  
いつもそうしているのだ。

「……………」  
「……なんでお前はここにいたいんだ？」

珍しく千葉から声をかける。

ミドリはしばらく沈黙してからゆっくりと答える。

「んー、なんでだろう？そんなこと考えたことないや」

「考えてないだと？馬鹿か」

「馬鹿でいいもん」

口を尖らせる。

「でもさ、僕がここにいれば毎日の掃除しなくていいんだよ？」

「掃除くらい自分でできる」

「そういうこと言う人っていざ一人になるとできないんだよ。知ってた？」

反論すればまた何か返してくるので千葉が先に黙る。

「それに食事も僕が作ってるじゃん」

「ここ1週間で鍋を3つ焦がしてるがな」

「それは眠かったんだもん。しょうがないじゃん」

頬を少し赤らめる。

「家事全般してあげてるんだから泊めてくれたっていいじゃん！」

「家事全般を完璧にこなせるようになってから言え」

ミドリはぐっと押し黙る。

言い返せないようだ。

しばらく沈黙が続く。

ちらっとミドリを見るとミドリは一生懸命涙をこらえている。

千葉は「はぁ」とため息をつきながらメガネをはずす。

「そんなにここにいたいのか？」

千葉の問いにミドリが顔を上げる。

「うん」

「家事全般をやるならできるように努力しろ」

千葉の言葉に希望が見えてきたミドリの顔が明るくなる。

「わかった」

「あとは、休みの日くらい家に帰れ」

「えー」と嫌がる声を上げたがしばらく考えて頷いた。

「仕事の邪魔をするな。泣くな。すねるな。寝るときは部屋で寝ろ」

思いつく言葉を全部吐き出す。

心の中ではそれくらいでいいって思っても口が勝手に動く。

「それとな……もうないか」

「それが全部できればここに泊まっていい？」

懇願のまなざしで千葉の顔を覗き込む。

「それができるなら好きにすればいい」

ふんと鼻を鳴らしてミドリから目を離した。

視界の端でミドリが喜びの笑みを浮かべてるのが見える。  
その顔にふと笑いがこぼれる。

「千葉が笑ってる。珍しいね」  
「うっさい。黙ってろ。さもないと追い出す」

千葉の言葉にミドリはクスクス笑いながら「冗談だよ」と言った。

朝からリンリンと鳴らされるチャイム。

インターフォンとも呼ぶ。

それは何度も連打するようなものではなく、人を呼ぶために一度押すものだ。

部屋の主である千葉にはこのチャイムは誰が押してるのかわかっていた。

そして、怒鳴る準備もできていた。

未だになり続けるチャイムに額に血管を浮かせながらドアの前につく。

ドアにたどり着く頃にはチャイムからドアノックに変わっていてドアが悲鳴を上げていた。

一息ついてから勢いよくドアを引く。

「てめえは朝っぱらから何してやがる!？」

威勢よく怒鳴りつける。

目の前に次を叩こうと腕を振り上げたまま固まったミドリ。

ぽかんとした顔は千葉が起きていることを予想すらしていなかったようだ。

「いい加減にしろ! てめえにこないだ鍵渡しただろうが!!」

「えっとね、その鍵なんだけど...」

うじうじとした声でミドリが千葉を見上げる。

「もしかして、無くしたんじゃないかな!？」

この反応、まさか本当に無くしたのか。

無くさないと約束したから渡したのに一週間もせずに無くすとは。

「約束破ったら出ていくんだっつよな。荷物をまとめろ」

千葉の言葉に慌てたように「タンマタンマ」と声をあげる。

「鍵を無くしたんじゃないかってね。その.....そこに置き忘れちゃってね...」

ミドリが指差す方向へ視線を向ける。

下駄箱の上に置かれた鍵入れに鍵が二本乗っていた。

一本は千葉のもの。

もう一本はミドリのもの。

「.....」

「この部屋、オートロックなの忘れちゃってね。そのまま部屋を出たら閉め出されちゃって」

言い訳をつらつらと並べている。

ミドリの声など耳に入れずに千葉はふつつつと溢れ出す怒りに耐えていた。

ミドリは相変わらず思いつく言い訳を片っ端から並べ、千葉の顔色を伺っている。

「てめえが言えることはそれだけか？」

冷静を装って言う。

千葉が聴きたい言葉をミドリはまだ一度も言っていなかった。

「うえ.....」

千葉に言われてミドリは黙った。

きょとんとわけのわからない顔をしてからはっと何かに気付く。

「え、えっと。ごめんなさい……」

少しうつむき目を横に逸らしながらボソツという。

「よし」

千葉はミドリの頭をポンポンと叩くと後ろを向いた。

「入っていいの？もう怒ってないの？」

「勝手にしろ。俺は寝る」

勝手にしろは千葉なりの許しの言葉。

ミドリはにこっと笑って玄関へ入った。



## 昼寝

---

「ねえ、それって面白いの？」

ダイニングテーブルの向かいに座って頬杖をついてるミドリ。  
千葉は仕事の残りを家で終わらせるためにノートパソコンを開いていた。

「面白く見えるか？」

「見えない。だから聞いているの」

「面白くはない」

「それならやめちゃいなよ。それで僕と昼寝しよ」

意味がわからない。

「やめちゃいなよ」まではわかる。

しかし、最後の昼寝がわからない。

「眠いのか？」

「うん、眠い。今この場でボタンキューしてしまうかもしれないくらいに眠いの」

「寝るなら寝室で寝ろ」

うとうとしているミドリに声をかける。

それでもミドリに動く様子はない。

「ここで寝るなよ」

「んー。眠いなあ。千葉と一緒に寝てくれればいいのになあ」

甘えた声を出す。

そんなことをしたって千葉が動くわけがない。

「あ、そういえば。昨日、ホラー映画見てたな」

にやりとミドリを見下ろす。

テーブルにうつ伏せになり、腕で顔を隠している。

凶星か。

「ち、違うもん。ミドリさんは怖がってなんかないもんね」

耳まで赤くしてミドリは反論した。

自分で「そうです」と言ってるようなもんだ。

「ふーん、そうか」

あえて無視する。

このあとの反応が気になったのだ。

しかし、予想はずれミドリは何も言わなくなった。

喋らないなら喋らないで邪魔にならないだろうから仕事の続きに目を向けた。

ありったけの集中力を使い切った。

あれから3時間くらいたってるだろうか。

一区切りがつき、休憩を入れる。  
キッチンでインスタントコーヒーを作り、テーブルに戻る。  
目の前にうつ伏せになったミドリに声をかける。

「眠いなら寝室で寝ろよ」

無反応。  
それからスースーという寝息が聞こえた。

(遅かったか)

目の前で寝息を立てられてたら仕事に集中できない。

(ここ数日まともに寝れてないから仮眠でも)

思ったが吉日。  
すぐに行動に移った。  
パソコンはつけたままで構わないだろう。  
眼鏡をテーブルに置き、ぐーっと背伸びをする。  
ずっと同じ体勢をしてたため、ぽきぽきと音がする。  
さすがにここで寝れるわけもないし、寝室で寝たら仮眠じゃなくなる。  
リビングに置かれたソファに腰をかける。

(ここならいい天気だからよく寝れるな)

窓の外を少し眺める。  
鳥が気持ちよさそうに飛んでる。

(よし、寝る)

ソファに横になる。  
ゆっくり目を閉じれば、疲れの溜まった頭は自然に眠りにつく。

「んー」

不機嫌な声を上げる。  
千葉の声だ。  
まだ10分も寝ていない。  
しかし、体の上に重みを感じ目を覚ます。

「重くて暑い」

千葉の体の上にはさっきまでテーブルで眠っていたミドリ。  
千葉と向き合うようにうつ伏せで眠っている。

「子供体温ってやつか」

ミドリの体温は千葉よりずいぶん高く感じた。  
暖かいを通り越して暑かった。  
それに14歳の少年だ。  
それなりの体重が乗っていたのだ。

「アホ、寢室で寝ろ」

「千葉がここで寝るなら僕もここで寝る」

まだ眠っていなかったらしくミドリが答えた。  
千葉が寢室で寝るわけにはいかないから黙る。  
我慢するしかないと言ったのだ。

(重い……)

しばらくすると寢息が聞こえてきた。  
眠ったことで体の力が抜け、重くなる。  
重く感じる。  
動くこともできず、千葉はため息をつく。

「はあ、めんどくせえ」

小さく呟くと千葉はミドリの背中を撫でながら目をつぶった。

## 指輪

---

「ねえ、灰皿に指輪入れるのやめなよ」

唐突に言われた。  
棚の前でぼーっとそれを見ている。  
棚の上には昔千葉がつけていた指輪などのアクセサリ一類が灰皿に入っている。

「これ、いらぬなら頂戴」

ゴツゴツした指輪を一つ取った。  
千葉は何も言わずに新聞を読んでいる。  
ミドリは指輪をはめてみる。

「あ、ぶかぶかだ」  
「そりゃな。俺が高校でつけてた指輪がお前にぴったりだったらこええよ」

新聞から目を離さずに千葉が嫌味を言う。  
真実だけどミドリには嫌味に聞こえた。

「いいもん。あと3年もすればぴったりになるもん」  
「勝手に言ってる」

無理に話を切り上げてまた新聞を読む。  
千葉の態度にミドリが「ぶう」と声を出す。千葉が振り向くことはない。

「じゃあ、いいもん。もらっちゃうから」「ダメだ」  
「なんで？」  
「ダメなものはダメ」  
「つけてもらえなかったら指輪が可哀想じゃん！」

ミドリの言葉に千葉が新聞から目を離す。  
千葉には一回聞いただけじゃ理解できなかった。  
指輪が可哀想？

「だってさ、指輪ってつけてもらうためにいるわけじゃん。なのに、千葉は指輪をしてあげない。指輪が可哀想だよ」  
「指輪の気持ちってか」  
「うん、そだよ。知ったかだけどそうだと思うんだ」

その後もミドリは指輪がどうしても欲しいらしく指輪の気持ちを語った。  
語られたところで指輪をあげるつもりのない千葉はそれを右から左へと聞き流した。

千葉が玄関で靴を履いているとその気配に気付いたミドリが駆け寄ってくる。

「あれ？今日、仕事なの？」

ミドリの声に軽く顔を上げる。

「ああ」  
「うそつき。私服じゃん」

仕事は普通の会社員のためスーツで仕事をしている。  
しかし、今日は私服だった。  
つまり仕事ではないってことだ。

「何処行くの？」  
「何処だろうな」  
「同窓会でしょ」

ミドリが顔をにやりと動かした。  
千葉は靴紐を結んでた手をピタリと止めた。

「凶星でしょ？」  
「ああ、んじゃ行ってくる」  
「なんでわかったか聞かないの？」

気になるところだったが、手紙でも見つけたんだろうと思った。  
返信を送るまで少しの間、千葉の部屋の棚に置いておいたからそれを見たんだろう。

「ま、手紙を見たんだけどさ」

やっぱり。  
千葉が「ふん」と鼻を鳴らす。  
くだらない。

「それでね、千葉が一生懸命私服を選んでたからお手伝いしようと思ってね」

ミドリは言葉を続けた。  
千葉が立ち上がってミドリを見る。

「これ、あげる」

手の中に包まれたケースを見る。  
この大きさは指輪か。

「開けて見てよ。たぶん好きだから」

結婚指輪じゃあるまいし、こんな高そうなケースに入れなくても。  
いや、ミドリのことだ。  
父親に頼んで高い指輪でも買ってよこしたってことかもしれない。  
それはそれで受け取りにくい。

「大丈夫。ケースは跡付け。肝心なのは中身だしね」

信用ならなかったが、開けないことには出かけられそうにもなかった。  
ゆっくりその蓋を開ける。  
骸骨の顔が覗く。  
どう見ても千葉の指輪だった。  
灰皿の中に置かれていた指輪。  
高校の時に初めて買った指輪。  
ゴツゴツした銀色の指輪を集めた原因。

「俺のだろ、これ」  
「うん、プレゼントとは言ってないよ。これがその服に似合うと思ってさ。赤のシャツに

黒いジーンズ。白のベルト。これつけたらばっちりだよ」

はめさせたいだけだろう。

しかし、ミドリの言った組み合わせは高校の時千葉が好んで着ていた組み合わせだった。

「同窓会だったらやっぱり思い出のものをって思ったの」

ちょっと照れくさそうに笑う。

千葉は何も言わずに後ろを向いた。

ドアを開け、出かける。

「行ってらっしゃい」

ミドリがそんな声をかけたと思う。

でもいつも聞いているからあまり気にしなかった。

一階に下りるためエレベーターホールに立つ。

二つあるエレベーターはどちらも下に向かっていてすでにこの階を通り越していた。

手の中にある指輪ケースに目をやる。

(持ってるの邪魔だな)

そんなことを考えながらしばらくの間、エレベーターが登ってくるのを待った。

「夕刊夕刊。来てるよねー」

上機嫌のミドリが一階のエレベーターホールに到着する。

千葉が指輪を受け取ってくれたことが嬉しかったのだ。

鼻歌混じりに郵便受けに向かう。

「夕刊は夕刊は、夕飯を食べてくれる証拠お♪」

周りに人がいないことをいいことに歌いだした。

「あれ？なんか入ってる」

郵便受けには新聞やらチラシやらと一緒に何かが入っていた。

それに見覚えのあったミドリは機嫌が悪くなる。

「ひどいなあ。せっかく渡したのにこんなところに入れてっちゃうなんて」

郵便受けから千葉に渡した指輪ケースを出す。

「つけないなら部屋に置いてけばよかったのに」

ぶつくさと文句を言いながらミドリは指輪ケースを開ける。

そしてミドリの機嫌はまた元に戻ったのだった。

## 花瓶

---

毎日同じように過ごしてた。  
なんの問題もなく、なんのトラブルもなく、平穏な日々。  
ミドリが来る前はそれがあたりまえのはずだった。

「だからあ、ミドリさんが悪いんじゃないくてそこに花瓶があったのが悪いんだよ」

リビングの角で丸まったミドリが言う。  
床の上にはガラスの破片が散らばっている。  
状況は簡単に読める。  
千葉が寝てる間に掃除でもしようと思ってしてみたところ昨日までなかった花瓶に興味湧き触ったところ滑って割ったのだろう。  
いつもこんなもんだ。

「片付けはミドリさんができるから千葉は寝てていいからね」

まだ角でヒックヒックと声を途切らせてる。  
その状態で片付けなんてされたら怪我だけじゃすまなそうな勢いだ。  
ふうと小さくため息をついてから千葉はそこにしゃがんだ。  
目の前に広がるガラスの破片を手のひらの上に集める。

「千葉、怪我するよ」  
「お前がやったら血だらけだろ」

ため息をつきながら拾い上げる。  
カーペットの色が水で濃い色に変色している。  
大き目の花瓶をそう高くない位置から落としたため、破片は小さくない。  
適当に大きいのを拾って掃除機をかければ大丈夫だろう。

「掃除機取ってこい」  
「わん」  
「はあ？」  
「犬の真似」

わけのわからぬことをしてから部屋を出る。  
ガラスの破片が手に収まり、キッチンのゴミ箱に向かう。  
これならそれなりにごみが入っていてごみがまだ入るだろうから袋が切れることはないだろう。  
そんなことの前にはガラスは燃えないごみか。  
でも、燃えないごみの回収は昨日だった。  
つまりしばらくは捨てられない。  
となると間違えたらまた怪我するかもしれない。  
俺はないだろうけどミドリが怪我する可能性はある。

「ふう」  
「持ってきたよ。かけていい？」  
「ああ」

掃除機をコンセントにさし、かけ始める。  
掃除機のゴーツという音が響く。  
カラカラとチューブの中をガラスの破片が入っていくのが小さく聞こえる。

「カーペットの色は直る？」

「乾けば直るだろ」  
「そっか、よかった」  
「何がよかった？」  
「なんか……安心した」

よくわからないが、ミドリは安心したように肩を下げた。

「この花瓶、誰からもらったの？」  
「同僚」  
「純也から？」  
「違う」  
「そっか」

重い沈黙が流れる。  
口を開く場面じゃないと感じた。  
ただ黙ってカーペットが乾いていくのを見る。  
乾いてるのではなく床に染みを作っている。  
でもカーペットの上から見ると乾いていくように見える。

「誰から？」  
「教えない」  
「もったいないって思ってる？」  
「いや、全然」

素直に答えた。  
きっとこれをくれた人からすれば「もったいない」かもしれないが、くれた人個人にそこまでの感情は抱かない。  
ほとんど知らない人と言っていいくらい記憶にない人だ。  
一方的に思っていたらしいが一方的だ。  
言ってしまうには自分には何も関係のない人と等しかった。

「ひどいね」  
「そうか？」  
「知らない人でも貰ったなら感謝すべきだし、壊したなら後悔すべきだよ」  
「俺は壊してない」  
「それでもその人に事情を話して謝るべきだよ」

一言一言を確かめるようにミドリが口を動かす。  
顔を見ると少し悲しそうな顔をしていた。

「きっと花瓶をくれた人は千葉のことすっごく大切に思ってるんでしょ？だったら千葉はそれ全部に答えることはできなくても少しは答えなきゃ」  
「どういう意味だ？」  
「ちゃんと二人で会う時間を作って謝るなり、謝罪するなりしなっこと」  
「謝れっただけしか言ってねえじゃん」  
「謝れっと言いたいんだからいいの」

ふんと鼻を鳴らす。  
染みを眺めてたミドリは染みが見えなくなるとそこから背をぐーっと伸ばす。  
何か思いついたように顔を上げると、そのままりビングから出て行った。

「おかえりー」



夜から深夜に変わる頃。  
普段より遅く家に着いた。  
ミドリはまだ起きていた。  
いつもより遅かったのが気になったのか、玄関で待ってたらしい。

「遅かったね。寒かったよ、ここ」  
「寝てればよかっただけの話だろ」  
「遅かったら心配するのが普通だよ」

ミドリが照れくさそうに笑う。

「ねえ、謝ってきたの？」  
「ああ」  
「泣いてた？」  
「いや、笑ってた」  
「泣かしたんだ」

腕を後ろに組んですーっと前を歩いていく。

「泣かしてない。笑ってた」  
「笑うわけじゃないじゃん。泣き笑いだよ、たぶん」

ネクタイを緩めてる千葉をじーっと見つめる。

「なんでわかる？」  
「そういうもんだから。恋するとみんなそういうもんなの」  
「ふうーん」

聞き流す。  
あまり興味のないことだった。

「千葉だってあるでしょ？」  
「ないな」  
「あるよ、絶対！純也が綾姉の話してるときとかちゃんと笑えないでしょ？」  
「姉貴の話ってだけで笑えるわけがない」  
「苦笑いとかしかできないでしょ？」  
「笑うことは談じてない」  
「あっそ。もういいよ」

ミドリがすねる。  
椅子の上に両足を乗せて体育座りする。  
口を尖らせる。

「千葉はあれだよ。人間じゃないからきっとそんな気持ちにならないんだよ」  
「俺は人間だ。ただ社長にそういう気持ちになってないからそう思うだけだ」  
「強がってるだけの癖に」

ミドリのすね方が激しいから千葉はキッチンに入る。  
冷蔵庫の残りを確かめる。

「なんで僕に何も言わずにその子に謝ってきたの？」  
「言う必要があったか？」  
「謝れって言ったの僕だし」  
「だからって言う必要があったか？」  
「ないけどさあ……言っただけじゃなかったかなって思っただけっ！」

突然怒鳴るだけ怒鳴ってミドリは部屋を出て行った。  
リビングが急に静かになった。

翌日。  
夜がどんなに遅くても朝は同じ時間に来る。

「おはよー」

そしていつもと同じ顔をしてミドリは起きてきた。  
昨日のことをすっぱり忘れたような顔をして……。

「早くしないと遅刻するぞ」  
「それは千葉も一緒だよ」

昨日のことなんか本当に忘れたようにニコニコ笑ってる。

「さーて、ミドリさんはまだまだガキンちょなクラスメートのところに向かうかな」  
「わざわざ言わなくて結構」  
「焼きもちくらい焼いてよ」  
「やきもち焼くのは俺じゃなくてミドリな」  
「ち、違うもん！ミドリさんは焼きもちなんか焼かないかんね！」  
「勝手に言ってる」

ミドリは強がったがやっぱり昨日のは嫉妬だったらしい。  
態度からそのことがよくわかった。  
でも、だからといって何が変わるわけではない。  
何を変える気もない。

「ほら、珈琲なんて飲んでると時間なくなるよ」  
「ふん、俺はそこまであせらなくてもいいの」  
「優雅なフリして内心焦ってるくせに」

こうしてまたいつもの毎日が始まる。  
それはこれからも変わらないことだ。

「千葉はさ、夢って覚えてる？」

「覚えてない」

「そっか、もったいないね。夢ってね、願望や欲望とか恐れてるものとかわかっちゃうんだよ」

「へえ」

「ミドリさんね、この間まで犬嫌いだったの。でもね、夢で犬が出てきたら嫌いじゃなくなったんだ」

「克服したのか？」

「そういうことだと思う。夢の中の犬は優しかったから」

「ほお」

「夢ってね、覚えていようって思いながら眠ると覚えていられるんだよ」

「嘘だろ」

「本当だよ。起きてすぐははっきり覚えてる。んでね、それをもう一回思い描いたり、メモしたりするとずっと覚えていられるんだよ」

「へえ」

「でもね、ミドリさんは近頃、自分の記憶が夢なのか現実なのかわかんなくなってきちゃった」

「たとえば？」

「僕は千葉を殴ったことないよね？」

「ないな」

「僕がこの部屋に来てから千葉は恋人作ってないよね？」

「ないな」

「それならいいんだ。このあたりすごく曖昧だったからすっきりした」

「そんなに夢を覚えていたいのか？」

「んー、夢って楽しいよ。面白いしね」

「現実楽しくなくて、面白くないか？」

「そんなことはないけど」

「だったら夢と現実がわからなくなるまで夢を覚えとく必要はないだろ」

「そうかもね。んー、あっ」

「なんだ？」

「千葉が手繋いでくれたら、夢覚える必要なくなるよ。もう一度あの夢を見たいだけだから」

「……………」

「無理ならいいよーだ」

「……………」

「……ふふっ」

「なんだ、その笑いは？」

「いや、なんでもないよ。ふふっ」

「ねえ、千葉。僕ちゃんってば、天才なんだよ。知ってた？」

「知らねえな」

「パパが言ってたんだ。人はみんなどこかしら何かしらの天才でそれを見つけられてないんだってさ」

「ほう」

「だから千葉に千葉の天才の部分、教えてあげる」

「んー？」

「千葉はね、ミドリさんを惚れさせる天才だよ」

「それは喜ぶべきか？」

「さあ？千葉が喜びたいなら喜ばばいいと思うよ」

「お前は どう思うんだ？」

「僕？僕はただ思ったことを口にただけだから」

「そうか。なら俺もお前の思ったことを聞いたただけだ」

「うん、それだけだね」

「ああ、それだけだな」

## 宿題

---

休日。

仕事が休みの日。

それと同時に学校も休みの日。

千葉はマンションの一部屋の中で休み中に終わらせる予定の仕事をしている。

ミドリはミドリで宿題をやっている。

「千葉あ、これわかんない」

「それくらいわかれ」

先ほどからミドリのわからないところをいちいち教えてやってるのに、さっぱり理解しない。

何度似た問題を教えてやったか数え切れない。

「まだ5問目だし」

「5問やればわかるだろ、それくらい」

「わかんないものはわかんないの」

口を尖らせてぶつぶつ文句を言う。

中学生はこんな勉強をしてるのかと思いつつも、こいつはこんな問題もできないのかと呆れ返る。

「これなんてみんなできないもんね。できないのが当たり前なんだから」

「そんなことはない。授業を真面目に受けてればできないわけがない」

ますます口を尖らせる。

しかし、中学生とはみんなこんなもんなのか。

こいつが勉強熱心なわけがないのはわかってたことだがここまで馬鹿だとは思ってなかった。

「馬鹿だなとか思ってるんだろうけど、やればできるんだからねっ！」

「やればできるなら今すぐやれ」

「今はやる気になれないからやらない」

今まで一度もやる気になったことはないってことだな。

そしてこれからもやる気になる気はないと。

千葉はため息をついた。

「さっきと同じ公式に当てはめればできるから一人でやれ。こっちが進まない」

「こっちだって進まないんだよ。困ってるんだよ」

「明日俺が困るのとお前が学校で困るのとどっちがいいかって聞くなよ」

前者に決まってる。

仕事と義務教育は比べられるものではないだろう。

「ぶう」

「ごねてもねだっても無駄だ。しばらく自分の力でやれ」

言いたいことを伝えると千葉は目の前に置いたノートパソコンに目を向けた。

それから1時間たったころだろう。

集中力も切れ始め、ちらっとミドリのほうをのぞいた。

ミドリは1時間前から変わらず集中をした様子はなく、鉛筆を振り回して遊んでいた。

ここで「教えてやる」なんて言ったら甘えるだろうから無視するか。

でも、このまま無視したら、あの鉛筆遊びが広がってくるだろうし。

そして、鉛筆遊びをしてれば俺が悩むことを予想してそうな気がしてならない。

「ぶんぶんぶーんって飛行機になったりしたりしないのが鉛筆のつまらないところだよ」

飛行機になったらそれはそれで困るだろうが。

独り言をぶつぶつ呟きながら楽しそうに鉛筆を振り回す。

あのまま振り続けて手からするりと鉛筆が抜けたら危ないなんてことを考えながらパソコンの画面を見る。

明日やればなんとか終わる量まで終わらせてある。

終わるけど明日一日ここに座らないと終わらない量だ。

しかし、目の前で遊ばれていては仕事に集中できない。

「宿題しろ」

「やだね。わかんないもん」

「それくらいわかれ」

ずいぶん前に同じことを言った気がする。

「どこがわかんないんだ？」

「どこがわからないのかわかんないよ。もう宿題そのものがわからないんだ」

末期だ。

これをどうにかするのは無理がある。

しかし、そこで諦めたら千葉の負け。

「さっきの問題はどうした？」

「わかんない」

つまりやってないしやる気もないってことか。

千葉はため息をつきながらメガネをゆっくりかけ直す。

「鉛筆をしっかり持て。このページが終わるまで夕飯なしな」

「えー。ミドリさん一人じゃできないもん」

「できないじゃないやれ」

ミドリの尖った口を気にすることなく思ったことを口にする。

その態度にまたミドリは「ぶー」と声を上げる。

千葉は珈琲を入りにキッチンへ入る。

その姿を見てミドリは黙る。

やらなければ本当に夕飯が出てこないということがわかったのだ。

「わかったよう。やりますよおーだ」

拗ねたミドリが鉛筆をかまえる。

コップの中に珈琲を注ぐ音が響く。

鉛筆が紙にこすれる音はしない。

つまりミドリは問題が解けずに諦めているということだ。

「まだ一問も解けてないのか」

注いだばかりで湯気が立つ珈琲を片手にテーブルに戻る。

「ノートか紙貸せ」



「え？」

ミドリがぎょとんとしてるうちに千葉がミドリの手元にあった紙類の中から白紙が多いものを選ぶ。

ミドリの手に握られてた鉛筆も奪い取り、一通りわかりやすい説明と公式を並べる。

「これでできるだろ。やれ」

プイッとそっぽを向きながらミドリに紙を渡す。

それを受け取ったミドリはにまにまと笑みを浮かべながら手元の宿題に取り掛かった。

「終わったー！」

ミドリが大声で叫ぶ。

背もたれにぐーっともたれ伸びをする。

「千葉！終わったよ。ご飯食べるよ」

「ん……」

ミドリの宿題があまりにも時間がかかるために千葉はソファで仮眠を取っていた。急な目覚ましに頭をぼんと叩く。

「頭叩いてもミドリさんは止まらないんだからね」

何もかもお見通しみたいな顔を千葉に向ける。

よほど腹が減ってるのか千葉の寝起きが悪いのかソファに座り直してもミドリがいろんなところを叩く。

「ご飯！ご飯！はーやくご飯！」

「わあったから叩くな！！」

何も言わないとこのまま叩き続けそうなので怒鳴る。

これでやっと眼が覚めたことになったらしくミドリが手を動かすのをやめる。

「ミドリさん、シチュー食べたい」  
「めんどくさいから、スーパーの刺身な」  
「えー」  
「文句言うんだったら自分で作れ」

財布を持って立ち上がるとミドリが後ろで文句を言う。

「だって刺身の次の日は絶対に漬け丼なんだもん」  
「当たり前だろ。刺身があまったら次の日は漬け丼。カレーがあまったら次の日はカレーうどん。そう決まってるんだよ」  
「えー。でもシチューが食べたい」  
「よし、じゃあ明日はシチューそばだ」

もうここはこうするしかないだろう。  
無理な組み合わせを言ったらきっとミドリは諦める。

「それはやだ」  
「だったら今日は刺身決定」

シチューそばより漬け丼のほうがいいらしく、そのあとは何も言わずに後ろをついてきた。

「じゃあ、マグロとイカだけじゃなくてサーモンも買ってよ。サーモン食べたい」  
「そんなに食いきれないだろ」  
「食べるからー」

駄々をこねるように後ろから抱きつく。  
それを引きずるようにして玄関に向かった。  
表では「買ってやるもんか！」と思っているし顔にも出ているが、スーパーに入ると「まあいっか」とカゴに入れてしまうだろう。  
それは行く前から千葉にもミドリにも見えていた結末だった。